三燦会活動について

三燦会会長　仲川　浩明

会員の皆様には、日頃より三燦会活動にご理解ならびにご協力を賜り、誠にありがとうございます。また、後援会役員の皆様には、三燦会との連携活動において、ご指導ご鞭撻を賜り改めて御礼申し上げます。

さて、保護者の皆様には三燦会の役員が何をしているのか分かりづらいとの声があると思いますが、会の役員は、八月以外は毎月の定期役員会に参加し、学校側と連携しながら、決議事項の審議や活動報告を行なっております。役員の大半の方がお仕事をお持ちですので、ご家庭とお仕事の両立に加えて役員会への参加と、大変なご苦労をされていることに頭の下がる思いです。

発足してまだ三年目の会ですが、今まで試行錯誤しながら進めてきた活動も、ここにきてようやく軌道に乗ってきた感があります。そこで、これからも三燦会が輝き続けることができるように、今の会則をより分かり易い内容とし、現状に合わせた運営ができるように「会則改正」を行なうべく、現在審議中です。

引き続き、会員の皆様におかれましては、三燦会活動へのご理解ならびにご協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

末筆ながら、東洋高等学校に携わる皆々様のますますのご発展とご健勝をお祈り申し上げます。

三燦会役員の方々

江戸歴史探訪 ②　「神田河畔茗渓の歴史」

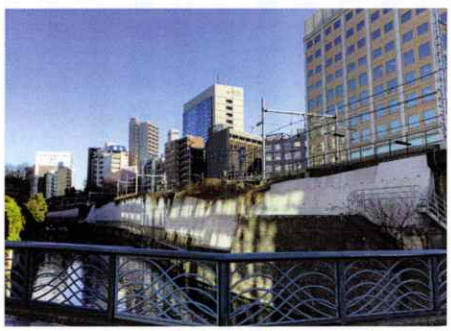
松竹　梅里

さて、今回は東洋高校旧校歌に「神田河畔にそびえて立てる」とあるように、東洋高校の北側、さいかち坂を挟んで神田川は滔々と流れています。しかしこの神田川には時代に翻弄された数々の歴史がその流れの中に留まっているのをご存知でしょうか。実は、江戸時代初期までは神田川そのものは無く、さいかち坂を登り切った頂きは、神田山と云われ台地が形成されていました。

一五九〇年、徳川家康は江戸入府に先立ち家臣らに江戸庶民の飲料水の確保を命じて井の頭池を水源とする神田上水の開鑿に着手しました。井の頭池から小石川の関口大洗堰で左右に分水し、左を上水に使う水として水戸藩邸を経て江戸市中に木樋や石樋などを使い流し入れ、右の分水は江戸川と呼ばれ、飯田橋で本流の平川に合流して日比谷の入り江に流れ込んでいました。この平川が神田川の源流となりますが、当時の平川は日比谷の入り江から江戸川橋付近まで海水が遡上するほど高低差がなく、飲料水に適していなかったため神田上水の開鑿が急務とされました。

二代将軍徳川秀忠の時代になると、平川下流域の洪水対策と外堀機能の強化、そして江戸居住域の拡大の為、仙台藩主伊達政宗に命じ、牛込橋付近から秋葉原を経て浅草橋の東で隅田川に合流する大規模な瀬替え工事を担当させました。政宗は江戸防備の外堀機能を備えた河川の開鑿を視野に神田山を切通して秋葉原に繋ぎるルートを考案し、大工事の末に完成させました。これにより、神田山は両岸に分かれ、南に駿河台、北側は湯島台となり、その深く掘り下げた渓谷は仙台堀と呼ばれ、またその深淵たる風景を愛でて「茗渓」の雅称まで付けられたほどでした。そしてその開鑿により出た土砂を日比谷の入り江の干拓に用いて、日比谷から銀座を経て八丁堀、新橋あたりまでの地盤拡張が行われ、広大な土地を得て江戸の町は大きく発展して行きます。この新しい河川は「神田川」と命名されましたが、当時は、飯田橋より上流は江戸川と呼ばれ、飯田橋より下流が神田川と呼ばれていました。明治時代になり河川全域の名は「神田川」に統一されましたが、今でも江戸川橋などその名を地名や駅名に残しています。

さて、最初にお話しした神田上水ですが、この政宗の大工事によって、神田上水は無くならずに樋に橋を懸けて神田川を渡しました。それが水道橋で、この地名の由来となっています。東洋高校の対岸にはその跡地に記念碑が建てられ、往時の面影を残しています。この様に神田河畔には、多くのモニュメントがそれぞれの歴史を、遥かな時代を越えて今に伝えています。



神田河畔を臨む東洋高校